

沼津市

明治史料館通信

2002. 4. 25 (季刊 年4回発行) Vol. 18 No. 1 通巻第69号



江川永脩の戊辰戦争での奮戦を描いた錦絵
(沼津市明治史料館所蔵)

明治29年4月15日発行 印刷兼発行者加藤忠兵衛 楊州周延画

右上の説明文には、江川永脩(隼太)が戊辰に際し幕府の「陸軍々事掛り鎮征頭取」として武蔵・下総の利根川筋や鴻の台・船橋方面に出張し、脱走軍の鎮撫にあたったこと、静岡移住後は銃砲・火薬の製造教授や三方ヶ原の開墾に従事し、一等勤番組になったことなどが記されているほか、『明治孝節録』にも事跡が掲載されたこと、西南戦争や天皇の銀婚式に際して家伝の銃砲や刀剣を献納したことが記され、「実ニ明治之銘家ト云ハンカ」と結ばれている。

シリーズ
沼津兵学校とその人材

63

静岡藩軍事掛附出役

江川永脩と戊辰戦争

沼津兵学校の管理部門である静岡藩

軍事掛の職員の一に江川永脩(隼太)・

隼太、文政9年6月8日生、明治34年

9月27日没)という人物がいた。彼の

静岡藩以降の履歴については、『沼津市

明治史料館通信』第44号においてすで

に紹介した。沼津で銃砲の製造・修理

を担当したり、三方ヶ原で開墾に従事

したことは、白井喬二著『国民挿話全

集 第八巻 社会公益篇』(一九三〇年、

万里閣書房)中の「江川永脩が篤行」

という短文にも紹介がある。

ここでは、江川が沼津に移住する直

前の戊辰戦争時における興味深い動向

について、彼自身が書き残した「先祖

書并勤役中次二家族共明細書」(明治三

年五月、葦山町柏木家文書)をもとに

述べてみたい。

同史料によると江川家は、先祖宇野

大和守頼永が徳川家康に仕えて以来の

旗本だということだが、『寛政重修諸家

譜』などには記載がない。四代目治郎

右衛門親輔が「閑道調役」に任命され



明治29年撮影 江川永脩71歳
(仁科又亮氏提供)

たという以外、親輔―至用―頼明―親経―義信と続く近世後期の歴代当主たちの職歴は不明である。永脩は辰五郎義信の七男であるが、やはり幕末期の履歴はわからない。永脩の経歴が記されるのは慶応四年（一八六八）二月、新御番格歩兵差図役並に任じられ、軍事掛の手付として働くように勝海舟から申し渡されて以後である。なお、勝の日記では江川の手付任命は三月一日の条に記述されている。

三月二日には前役を免じられ、松平太郎より「御使番格武蔵下総両国軍事掛鎮静方頭取」に任命された。勘定奉行並山田虎次郎が両国代官宛に出す触れにもとつき出張し、旧幕府脱走軍による騒動を鎮めるといふ職務であった。当時、官軍の江戸進駐を受け、旧幕臣の中には主君徳川慶喜の恭順の意思に従わず、あくまで抗戦しようという者が少なくなく、各地で脱走騒ぎが起こっていた。その説得工作にあたった江川は、まず七二三七名から請印（誓約書）を取り、三月二十六日江戸城で松平太郎に提出した。次に平岡丹波守より、大畑村・金町村・野田・流山辺の騒ぎを押さえるよう命じられ出張九〇六三名から請書連印を取るのに成功した。四月七日、江戸開城に際しては、本丸下の勘定所に詰め、廻村中の日記を松平太郎に渡したところ、官軍入城による混雑のため当分出張は見合わせるよう言い渡された。

ところが、閏四月二日、突然官軍の龍虎隊七十六名により役宅に踏み込まれ、逮捕されてしまった。脱走軍に内通し、官軍に間者を送りスパイ活動を行っていたという嫌疑であった。必死で弁明につとめた結果、疑いは晴れ、逆に大総督府より改めて武蔵下総両国鎮静方頭取役に任命するという命を蒙った。しかし、主家である徳川家を差し置いて直接そのような命を受けることはできないと返答した。十日にはなんとか釈放されたが、官軍が自宅から略奪していった器械・古筆・馬などの返還を要求したところ、助命してやっただけでも感謝されるべきものを、その上分捕り品の返還を求めると、朝敵のくせに不心得だと言いつつ拒否されてしまった。

この顛末を記した届書を松平太郎に提出し、何とか官軍による盗品が戻らないかと期待していたところ、八月八日雉子橋会計所に呼び出され河野左門より武蔵下総両国鎮静方頭取役を差免され、新たに阿部邦之助（潜）より陸軍御用取扱に任じられた。そして十一月十日には家族をまとめ沼津へ向かい出立することとなった。

武蔵において江川と同様の役割を果たした者には、他に信太歌之助（高橋泥舟の義弟・松波権之丞らがいる。いずれも勝海舟の指示を受けたもので、正規の役職ではなかつた（山形紘『東葛戊辰録』崙書房、一九八八）。勝は、戦火で江戸が火の海になった場合、信太らに房総の海岸から避難民救助の船を出させる秘策も準備していたらしい（勝「解難録」）。

沼津移住後、房総を騒がせた脱走軍のひとつ撤兵隊の指揮官であった江原素六が沼津兵学校の幹部となつていることを、江川はどのような目で見たのだろうか。

江川は、先祖を同じくする隣の葦山県権知事江川英武に誼を通じようと、自分の履歴と系図を記した「先祖書并勤役中次二家族共明細書」を送った。彼は、先祖の由緒と自分の履歴を非常に誇りとした。自分で資金を出したのだから、明治二十九年（一八九六）、七十一歳の江川は、戊辰戦争当時の自身を描いた錦絵を発行するとともに、旧幕時代の装束、烏帽子・直垂を着て写真を撮影している。

日清戦争勝利後のナシヨナリズムの高揚下、江川の誇りとは、徳川の旧臣としてのそれ以上に、天皇の臣民ひいては国家の功労者としてのものだった。（樋口雄彦）

ぬまづ近代史点描 ⑤0

昭和初期の観光バスによる沼津案内

沼津は、昭和初期に伊豆の遊覧

旅行が盛んになる中で、沼津駅と

伊豆各地とを結ぶ遊覧乗合自動車

(観光バス)の発着地点となった。

昭和十二年に東海自動車株式会

社が編輯・発行した『伊豆遊覧案

内』(西沢田平松家文書、Oicer

66)は、女子車掌が沿線を説明す

るための教本であり、当時の観光

の実態を知る上で興味深い。

沼津市については、沼津―三島―

天城―下田を結ぶ天城越中央線で、

以下のように紹介されている。

沼津市は、天城の谷から流れ出

た狩野川の河口にありまして、駿

河湾に望み昔から東海道の宿場と

して上り下りの旅人で、大変賑は

つた所で御座います。(中略)

現在では伊豆へは入る西の御玄

関で、戸数八千六百、人口四万七

千、商工業共に盛んで、伊豆一帯

の、山葵、椎茸、蕨、お魚類等の

取次地として、益々発展を続けて

居ります。

又御遊覧地と致しまして、千

本浜、牛臥、我入道、桃郷等の海

辺の景色は大変美しく、御避暑御

避暑地としても有名で御座います。

さらに、当時の沼津地域の観光

名所について、箕作―松崎―土肥―

三津―沼津を結ぶ伊豆西海岸線で、

以下のように紹介されている。

この附近一帯を桃郷と申しまし

て、桃の名産地で御座います。陽

春三月、花盛りには、畑一面花毛

氈を敷きつめたやうな美しさで、

まことに桃郷の名に背かない眺で

御座います。昔は、島の郷と書い

て、島郷と呼んで居りましたのを、

桃の栽培が始まつてから何時とは

無く、桃の郷と書いて、「桃郷」と

呼ぶやうになつたと申します。

この先の松原の中に、沼津御用

邸が御座います。御用邸は、本邸、

東邸、西附属邸の三邸に分れて、

総面積十萬坪と申され、明治二十

六年御造営になりましたから、屢々、

行幸啓の榮を賜はつて居りま

す。こちらが御用邸正門で御座いま

す。

あちらの松の茂つて居ります小

高い山は、先程申し上げました牛

臥山で、その麓に牛臥海水浴場が

御座います。



絵葉書「桃郷より牛臥山」部分 (山川正作氏寄贈)

あちらに人家の見えるす処を、

我入道と申しまして、狩野川の川

口に臨み、漁業と海産物の取引の

盛んな所で御座います。(中略)

この辺は香貫(上香貫、下香貫)

と申しまして、氣候が暖い為めに、

茄子、胡瓜、トマト等の促成栽培

が盛んな処で御座います。

あちらを御覧下さいませ。果て

し無く続く美しい松原と、秀麗な

富士の姿とを、明るい海に写す、

沼津の名所、千本松原で御座いま

して、殊に夏は海水浴や納涼地と

して賑やかで御座います。(中略)



絵葉書「沼津千本松原海岸」部分 (当館蔵)

あちらの松の茂つた山を、香貫

山と申しまして、只今では、沼津

の公園として、観光道路が縦横に

通じて居ります。富士を仰ぎ、狩

野川の川口から、千本、田子の浦

などを望む、山上の眺めは、真に

絵のやうな美しさで御座います。

以上、風光明媚な景色を楽しむ

情緒豊かな観光バスの旅がうかが

えるが、この教本が発行された昭

和十二年に日中戦争が勃発した。

以降、揮発油及重油販売取締規則

によるガソリンの使用制限等が行

われ、バスの運行は激減すること

になる。

〔参考文献〕東海自動車株式会社

社史編集委員会編『東海自動車

70年のあゆみ』(一九八八年)

お知らせ欄

◎企画展「絵葉書にみる沼津の名所」の終了

12月1日から開催していた企画展「絵葉書にみる沼津の名所」は、2月27日に終了しました。

また、2月3日に開催した歴史講演会「楨不言舎の文学」にも、43名の熱心な受講者がありました。



▶歴史講演会の様子

◎沼津市明治史料館史料目録29、30の刊行

史料目録29『久連区有文書目録』(B5版・一八六ページ、頒価五〇〇円)、史料目録30『旧幕臣・沼

津藩士関係文書目録』(B5版・一六〇ページ、頒価五〇〇円)を刊行しました。いずれも当館で所蔵・保管する文書資料の目録です。史料の検索にご利用下さい。

◎『沼津市博物館紀要』26の刊行
頒価…五〇〇円

内容…樋口雄彦「沼津兵学校と静岡藩小学校掟書」、同「沼津兵学校附属小学校教授永井直方の日記その二」、上野尚美「後北条水軍梶原氏と紀伊」

◎5月19日は無料開館日

5月19日(日)は、江原素六先生記念公園で記念祭が開かれます。当館では展示室を無料で開放します。

◎平成13年度受贈資料(受贈順)

写真週報(植松エイ様)、焼夷弾(後藤寿直様)、池谷観海掛軸(清水昭一郎様)、新渡戸稲造書複製等(渡瀬良道様)、古文書・白隠書幅・掛軸・和本等(原達郎様)、石油化学コンピュータ反対闘争資料(中嶋勇様)、浮世絵等(加藤雅功様)、絵葉書(鈴木裕篤様)、海軍技術研究所音響研究部の水道栓カバー(森

田至紀様)、沼津海軍工廠の電波探信儀等(勝又巖様)、沼津兵学校生徒佐々木慎四郎の手紙(下村旦子様)、同教授山本淑儀の双眼鏡(山本浩様)、古写真複製等(青木久米子様)、レコード等(倉長治子様他)、買入帳(大川規子様)、古書等(森裕子様)、浮世絵複製(宮口美知子様)、家永教科書裁判書籍(瀬川裕市郎様)、国勢調査員表彰状(芹澤香代子様)、画報等(鈴木忠男様)、駿東乃葉(荒熊元茂様)など。

◎平成13年度受託資料(受託順)

沼津城内の蔵のものと伝えられる内戸(川口基子様)、昭和26年の16ミリフィルム等(西浦地区センター様)。

◎平成13年度館蔵資料の出版物への写真・資料提供(未刊を含む)

『沼津中学・沼津東高百年史』、『御殿場線物語』旧東海道本線各駅停車の旅(文化堂印刷)、『産経新聞』「日本人の足跡―榎本武揚」欄、『日本人の足跡―二世紀を超えた「絆」を求めて―』(産経新聞ニユースサービス)、『しずおか歴史の玉手箱』(CD-ROM版)、小学校社会科副読本『沼津』改訂版、

『沼津市史料編近世3』、『沼津市史料編現代』

◎平成13年度館蔵資料の展示・放送用等貸出・提供先

豊橋市美術博物館「歴史の道く東海道」展(4月〜5月)、沼津市歴史民俗資料館「歩いてみよう東海道」展(7月〜11月)、西浦コミュニティ文化展(9月)、沼津物産センター味工房(2月)

◎館職員の人事異動について

4月2日付の人事異動により、事務補助員芹澤香代子が退職、後任に若松裕美(文化財センター事務補助員)が着任しました。今後とも変わらぬ御支援をお願い申し上げます。

沼津市明治史料館通信 第69号

編集 沼津市明治史料館
発行

〒410-0051 沼津市西熊堂三七二-1
電話 〇五五-九二二-三三三五
FAX 〇五五-九二二-三〇一八
http://www.city.numazu.shizuoka.jp/sisetu/meiji/index.htm